〈研究発表〉

第一室（11 月 23 日午後）

司会　葛西宏信（青山学院大学）

"*Without*-Absolute Constructions in English"

Ryu Takamatsu (University of Tokyo)

This study is concerned with *without*-absolute constructions (hereafter *without*-ACs) like *John sneaked into the room without anyone noticing*. As pointed out by [1], *without*-ACs and *with*-absolute constructions (*with*-ACs) differ in several respects (e.g. the (im)possibility of nominal predicates and the (un)availability of passive infinitives). After examining the little-studied properties of *without*-ACs, we argue that they cannot be analyzed on a par with *with*-ACs and that the properties of *without*-ACs are best explained if take the temporal dimension of language acquisition into account ([2],[3]). Specifically, we propose that *without*-ACs are derived from ACC-*ing* (e.g. [*without* DP_{ACC} V-*ing*]) on the model of *with*-ACs after the child becomes aware that the string of [*without* DP_{ACC} V-*ing*] can also be interpreted as the negative counterpart of *with*-ACs.

[1] Hantson, A. (1983) "For, With and Without as Non-finite Clause Introducers," *English Studies* 64, 54–66. [2] Kajita, M. (1977) "Towards a Dynamic Model of Syntax," *SEL* 5, 44–76. [3] Kajita, M. (1997) "Some Foundational Postulates for the Dynamic Theories of Language," *Studies in English Linguistics: A Festschrift for Akira Ota on the Occasion of His Eightieth Birthday*, ed. by M. Ukaji, T. Nakao, M. Kajita and S. Chiba, 378–393, Taishukan.

「インターフェイス条件による主語の移動制約」

(Interface-Based Constraints on Subject Movement)

末永広大 (九州大学大学院)

(1) の *that* 痕跡効果を始めとして、主語要素の移動は厳しく制約される。

(1) *Who do you think that *t* loves Mary?

近年 Chomsky (2015[1])は、 (1) に見られるような主語の移動制約を、弱主要部 T の問題に還元しているが、Chomsky の想定には多くの理論的矛盾が指摘されている (Hayashi (2020))。また、主語疑問文における主語 *wh* 句が CP 領域に生起することが多くの先行研究で報告されている (Messick (2020))。よって、自由併合の下で、これらの事実が同時に説明可能となる主語の移動制約の解明が急務となる。本発表では、ラベル理論の下で、主語の移動を制約するインターフェイス条件の明確化を行う。

(2) 主語の移動

= Free Merge + Interface Conditions (Affix Hopping, Case-assignment ...)

具体的には、Suenaga (2024[2])の T-to-C 移動分析に基づき、接辞移動と格付与の可否が主語の移動を制約すると提案し(= (2))、様々な統語現象の分析を通して、その妥当性を検証する。

[1] "Problems of Projection: Extensions," *Structures, Strategies and Beyond*, 3-16.

[2] "*Wh*-Subjects and T-to-C Raising in English," *English Linguistics* 40, 153-183.

第二室（11 月 23 日午後）

司会　森田千草　（帝京大学短期大学）

「関係形容詞から性質形容詞への転用: 競合的アプローチによる分析」

(Shift from Relational Adjectives to Qualitative Adjectives: Analysis based on a Competitive Approach)

西牧和也（新潟食料農業大学）

名詞派生形容詞は、その意味・統語的相違に基づいて、性質形容詞 (e.g. *beautiful*) と関係形容詞 (e.g. *industrial*) に区分される。しかし、関係形容詞は、多くの場合、性質形容詞に転用されるため、この区分は、しばしば、曖昧となる。本発表では、このような転用が、なぜ生じるのか、その要因を競合という観点から考察する。

関係形容詞と同様の意味機能を持つ表現として、N-N複合語の非主要部名詞 (e.g. *office duties*) が挙げられる。また、関係形容詞は、置換という操作によって形成されると考えられているが、Spencer (2005 [1]) によると、当該の非主要部名詞も、置換の適用により、形容詞化しているという。そして、両者の関係について、Nikolaeva and Spencer (2020 [2]) は、英語では、N-N複合語が標準的であるため、関係形容詞の生起は、制限されていると指摘している。以上のような考察に基づいて、関係形容詞は、置換形としてのステイタスを巡り、非主要部名詞と競合し、その結果、性質形容詞への転用が生じることを論証する。

[1] "Towards a Typology of 'Mixed Categories'," *Morphology and the Web of Grammar*.[2] *Mixed Categories*.

「動詞句省略と非対格性のミスマッチ」
(VP Ellipsis and Unaccusativity Mismatches)

椙本顕士（北海道教育大学）

様態動詞floatには、The boat floated (in place) のように動作様態を表す非能格用法とThe boat floated into the caveのように着点項を選択し、様態と移動の意味を表す非対格用法がある。まず本論の重要な言語事実として、このような非能格と非対格の交替（非対格性のミスマッチ）が動詞句省略の先行詞と省略部の間で観察され、具体的には非対格形を先行詞にし、非能格形を省略する場合には容認されるが、逆は容認されないことを示す。次に、Folli and Harley (2019 [1]) の軽動詞vの相違を利用した動詞句構造の考えを採用し、非対格構造には、非能格構造をその一部に含むような構造が存在すると提案し、Merchant (2013 [2]) の統語的同一性条件の下、特に軽動詞の種類の同一性（と相違）から上記の動詞句省略の非対称的な振る舞いを説明できると論じる。また本論の帰結として、非対格構造には上記の構造に加え、非能格構造をその一部に含まない構造も存在することを示す。

[1]"A Head Movement Approach to Talmy's Typology" [2] "Voice and Ellipsis"

第三室（11 月 23 日午後）

司会　菊地翔太（専修大学）

「英語史における名詞句の分離が示す DP 言語への言語変化」
(Language Change to a DP language in the History of English: Implications from Discontinuous NPs)

山村崇斗（筑波大学）

本発表では、英語の史的テクストを左枝分かれ条件や等位構造制約への感度の点で観察し、英語の NP 言語から DP 言語への言語変化の時期を特定を試みる。

左枝分かれ条件や等位構造制約への感度が DP 言語と NP 言語で異なるという指摘がある (Bošković (2014 et. seq[1]), Oda (2021[2]))。古英語ではそれらに違反する事例が観察されている (Traugott (1972[3]), Yamamoto (1989[4])など)。先行研究や電子コーパス調査から等位構造の分離の特定のパターンが 13 世紀前半以降は観察されず、左枝抜き出しの事例がほぼ古英語に限定されていることから、何らかの変化がこの時期にあったと考えられることを示す。
また、数詞 an 'one'は 13 世紀に縮減形 a が通例化したことで不定冠詞への経路を進み、指示詞 se 'that'から分化した þe が 1400 年前後に定冠詞として確立したという発達史に照らし、英語は NP 言語を脱したのは、不定冠詞が定着を始めた 1200 年以降だったと主張する。

[1] "Now I'm a Phase, Now I'm Not a Phase: On the Variability of Phases with Extraction and Ellipsis," *Linguistic Inquiry* 45, 27–89. [2] "Decomposing and Deducing the Coordinate Structure Constraint," *The Linguistic Review* 38, 605–644. [3] *A History of English Syntax: A Transformational Approach to the History of English Sentence Structure*, Holt, Rinehart and Winston, New York. [4] "The Historical Development of Determiners: A Parametric Approach," *English Linguistics* 6, 1–17.

「I saw them to be obnoxious. の 容認可否性について」

村岡宗一郎（日本大学）

現代英語の知覚動詞は原形不定詞と現在分詞を補文に取り、直接知覚を表す。その一方でフォーマルな英語や文語に限り、また使用される動詞もBEやHAVEに限定されるが、to不定詞を補文にとる知覚動詞は間接知覚を表す。Bolinger (1974) [1]等の先行研究はこのto不定詞

補文はthat節と同等の意味を持つと分析するが、この分析はBolinger（1977）[2]の「形と意味の一対一の対応関係の原則」に反する。

本研究ではto不定詞補文とthat節の類似性を検証し、コーパスや英訳聖書を用いてto不定詞補文はthat節に吸収される形で消失しつつあることを実証する。さらにこの仮説は大補文推移に逆行することになるが、類似する現象を調査した秋元（2023）[3]の分析を援用し、上記の分析の妥当性を図る。

[1]"Concept and Percept: Two Infinitive Constructions and Their Vicissitude." *World Papers in Phonetics Festschrift for Dr. Onishi's Kiju*, pp. 65-91. [2] *Meaning and Form*. [3]「まとめ」『近代英語における文法的・構文的変化』pp. 229-241.

第四室（11 月 23 日午後）

司会　平沢慎也（慶應義塾大学）

「as 構文と同時性の表現」

野島啓一（北九州市立大学（非常勤））

本発表は接続詞 as を含む二種類の構文に関して「同時性」の解釈を中心に検討する。

(1) As Connie went on speaking, Smiley's memory once again began to supplement her own.
(John Le Carré, Smiley's People. p.212)

(2) 'She was asleep---there was no struggle---the murderer crept up in the dark and shot her as she lay there.'
(Agatha Christie. Death on the Nile. p.170)

例文(1)の「as 前置型」は、[[事態]+場面]+[場面]の型式のように、表現主体が論理的関係のレベルでは場面の情報を必要条件として、認知のレベルでは焦点の対象として捉えている。即ち、二つの事態を「一緒にみている」叙述をする構文を表す。

例文(2)の「as 後置型」は、[事態]+[事態[場面]]の型式のように、場面の情報が背景化されて二つ事態の論理的関係を一つのコトとして捉えている。即ち、二つの事態を「一緒とみなす」叙述をする構文を表す。

「構文としての直喩表現 (*as*) ADJ *as* NP—同等比較構文からの構文化に着目して—

(The Simile Expression (*as*) ADJ *as* NP as a Construction: A Case of Constructionalization)

高木莉緒（筑波大学大学院）

英語における*as* ADJ *as* NP表現は一般にJohn is as old as Bill.(安藤 (2005:568))のような同等比較構文として知られている。一方、[…] the child was as light as a feather […] (COCA 2003 FIC)のように類似した形式が直喩の意味を示すことがある。この例は子どもを鳥の羽に喩えて非常に軽いということを表す。

Kay (2013[1])は後者のような表現は単なる「造語のパターン」 であり構文ではないと主張する。これを踏まえると、直喩の意味は同等比較構文を誇張した解釈から得られると考えられる。しかし、先行研究では直喩表現と同等比較構文の相違点が指摘されている。直喩表現は一つの構文といえるのだろうか。

本発表では同等比較構文から直喩構文へ構文化（Traugott and Trousdale (2013[2]))が生じたということを示し、直喩構文は独立の構文であると主張する。また、直喩構文は単に具体的な構文として存在するだけでなく、それらを抽象化した構文としても存在することを示す。

[1] Kay, P. (2013) "The Limits of (Construction) Grammar" [2] Traugott, E. C. and G. Trousdale (2013) Constructionalization and Constructional Changes

第五室（11 月 23 日午後）

司会　堀内ふみ野（日本女子大学）

「日本語と英語における証拠性「推量」の使用の揺れについて」

髙島　彬（尾道市立大学）

対訳のある英語と日本語の小説の地の文において、日本語の証拠性モダリティ（らしい、そうだ、ようだ、みたい）の推量用法の意味がその対応する英語表現では訳出されない場合がある。以下の例の登場人物「晴美」は目隠しをされた状態であるため、声だけを手掛かりに発話された質問が自分へのものであると推論している。そのため、日本語では証拠性モダリティ「らしい」が使用されているが、対応する英語ではその意味が訳出されていない。

(1) 「我慢できますか」晴美への質問らしい。
『ナミヤ雑貨店の奇跡』[1]
"Do you think you can hold it?" They were asking Harumi.
(*The Miracles of the Namiya General Store*)[2]

本発表では、対訳のある日本語と英語の小説の実例を基に、証拠性の推量の意味の有標化に揺れが生じることを指摘し、認知言語学と物語論の観点から、この揺れの要因として、物語を語る際に語り手が作中人物へ同化する度合いが異なるという事態把握（cf.池上（2011[3]））の差異が関与していることを主張する。

[1]東野圭吾『ナミヤ雑貨店の奇蹟』. [2]*The Miracles of the Namiya General Store*.Sam Bett(Trans). [3]「日本語と主観性・主体性」『ひつじ意味論講座５　主観性と主体性』.

「身体部位の 2 つの捉え方について：持ち主の受身を中心に」
(Two Paths of Access to Body Parts: Insights from Possessive Passives in Japanese)

田中太一（東京農工大学）
長谷川明香（東京造形大学）

日本語には (1)・(2) のような、いわゆる「持ち主の受身」が存在することが指摘されている。

(1) 私は彼｛に／から｝顔を殴られた。〈顔は私の顔という解釈〉
(2) 私は彼｛に／?から｝子供を殴られた。〈子供は私の子供という解釈〉

この種の受身文は、（対応する能動文の有無において対立する）直接受身と間接受身の両方の性質を持つものであり、受身文全体における位置づけについて合意が形成されていない状況である。

本発表では、行為者ニ表示とカラ表示の意味の違いに注目することで、身体部位（を中心とする所有物）には、（身体）全体における active zone (Langacker 1984) という捉え方と、働きかけや描写の直接的対象という捉え方の（少なくとも）2 通りが存在することを明らかにする。このような捉え方の相違はまた、「象は鼻が長い」構文や、英語の身体部位所有者上昇構文を分析する際にも重要なものである。

第六室（11 月 24 日午前）

司会　三上　傑（大東文化大学）

「副詞的働きをするfirst thing in the morningに代表される連鎖の特徴について」

西原俊明（長崎大学）

英語は、一定の環境下で文末に副詞的働きをする名詞句が生起できる。本発表では、I'll call you first thing in the morning.におけるfirst thing in the morningとそれに類する表現に着目し、統語的・意味的特徴を探る。問題の表現は、the/myなどの表現を前におくことは不可能であるのに対して、We talked the entire night.では、theは生起できる。これらの振る舞いの差異を空の前置詞と前置詞の具現化が選択できる場合とに分けて派生を考える。Rothstein (1995)の分析と同様に、first thing in the morningは空のPの補部位置を占めることを主張する。[1]"Adverbial Quantification over Events," *Natural Language Semantics* 3, 1-31.

「英語における付加詞の省略について」
(Adjunct Ellipsis in English)

小林亮一朗（東京農業大学）

本研究は、英語における音形を持たない空付加詞の性質を明らかにすることを目指す。特に日本語との比較を通し、英語における空付加詞の生起条件に関する統辞論・語用論的な分析を提案する。付加詞は通常、単独で削除できないと考えられてきた(Oku 1998; Funakoshi 2016)。しかし、近年その想定に対する経験的な反論が展開されている。付加詞の削除は項削除と比較すると、分布に制限が見られることは確かであるが、実は省略自体は可能である主張されている(Oku 2016; Tanabe and Kobayashi 2024)。英語の観察を通して「付加詞は単独で省略できない」という想定に対し、いくつかの反例を提示することで、統辞的には付加詞を省略することが可能であり、省略の難しさは語用論的な制約に帰されることを主張する。本研究の議論が正しければ、付加詞を直接削除する操作である Adjunct Ellipsis 分析 (Collins 2015; Oku 2016; Tanabe and Kobayashi 2024)を支持することになる。

第七室（11月24日午前）

司会　縄田裕幸　（島根大学）

「解釈可能性に基づく転送領域の決定と移動の制約」

長谷川優菜　（名古屋大学大学院）

本発表では、統語体の転送に関わる単位である「フェイズ」の定義を再考し、経験的帰結の1つとして、移動した要素の抜き出しと移動した要素からの抜き出しが不可能であるという事実、すなわち基準凍結と凍結効果に説明を与える。Narita (2011)の解釈可能性に基づくフェイズの定義を拡張し、解釈に問題が生じない構造は直ちにインターフェイスに転送され、さらなる統語操作を受けることが不可能となると提案する。また、命題領域外の談話に関連する解釈は、統語派生において、(i)対応する機能主要部との一致操作を適用されること、(ii)任意の指定部位置への移動により項位置に変項を残すことにより保証されると主張する。また、以上の分析は統語派生においてフェイズ末端への中間移動を仮定しないが、それは完全解釈の原理を厳密に満たすという点で「強い極小主義得命題」にとって望ましく、経験的にも問題がないことを示す。

Narita, Hiroki (2011) *Phasing in Full Interpretation*, Doctoral dissertation, Harvard University.

「Noun-after-Noun 表現の歴史的発達」
(The Historical Development of the Noun-*after*-Noun Expression)

尾野理音（名古屋大学大学院）

本発表では、day after day のように、同一名詞句が前置詞 after の前後に現れる Noun-after-Noun 表現(以下、N-after-N)の歴史的発達に説明を与えることを目的とする。現代英語における N-after-N は反復の意味を表し、当該の名詞句は可算名詞の無冠詞単数形に限られるが、このような N-after-N の諸特徴が英語史において確立した時期を、歴史コーパスを用いた調査により明らかにする。そして、Jackendoff (1997[1])の提案する三部門並列構成分析を採用し、N-after-N の統語と意味は独立して変化してきたと主張する。具体的には、18 世紀に N-after-N がイディオム化を受けたことにより、名詞句の統語構造が縮小され、その種類に意味的制限が課せられるようになったと提案する。

[1] Jackendoff, Ray (1997) “The Architecture of the Language Faculty,” MIT Press, Cambridge, MA.

第八室（11月24日午前）

司会　野中大輔　（工学院大学）

「不変化詞 *off* を伴う句動詞構文の意味と汎用性」

岩宮　努（神戸市外国語大学（非常勤））

非直接的な手段を表す動詞を主要部に伴い、目的語の事物からの影響を「回避」することを表す V＋*off* 句動詞構文は、「軽視 (1a)」、「節制 (1b)」、「除去 (1c)」など様々な意味に解釈される。

(1) a. Trump {shrugged off/ *shrug} the idea…　(US 2019)
b. …he has {sworn off/ *sworn} cigarettes…　(NZ 2018)
c. ...he needed a rest to {sleep off/ *sleep} the alcohol…　(IE 2014)
(NOW [1])

主要部の動詞のみでは通常使用できない *off* を伴う句動詞表現は生産性が高く、*wipe out [idea]*、*strip out [alcohol]* といった「労力」を伴う除去を示す V＋*out* 構文としばしば対照的な意味を成す。また、*round off [victory]*（勝利を決定づける）、*reel off [win]*（連勝する）といった「円滑な勝利」を意味し、近年よく用いられる比較的新しい句動詞表現も、*{grind/ dig/scratch} out [victory]* など、「労力」を伴う勝利を表す V＋*out* 句動詞構文との親和性によって生じたと考えられる。

[1] NOW Corpus

「副詞 out から前置詞 out への文法拡張プロセス: 反意語が文法拡張への動機付けとなりうる事例」(The Process of Grammatical

Extension from the Adverb *out* to the Preposition *out*: a Case in Which Antonyms can Motivate Grammatical Extension)

松田佑治（名古屋学院大学）

副詞 out は、out NP「NP を通り抜けて外へ」の意味の前置詞として機能することがある。ただし、その目的語は go/come out the door の the door や、look out the window の the window のような出入口・通過点を表す NP に使用域が著しく限られている。しかし、そもそも、out of NP が既に存在するにもかかわらず、本来は副詞であるはずの out に、なぜこのような余計な変種が派生しなければならないのか。そこで、本発表では、鈴木 (1985[1]) の一部を修正し、副詞 out は、その反意語 in による強い動機付けによって文法拡張した、と論じる。また、ある語とその反意語との類似関係にも、段階性があることを示す。そして、ここでの out/in の類似関係は、J & A (2020[2]) によって提示された「1 点を除いて他は全て同じ」という「同じ-除く関係」(the same-except relation) の内、「対照」(contrast) に該当する、と指摘する。その上で、out/in 同士の類似性をより具現化する。

[1] 鈴木猛.「前置詞としての out (1)(2)」『英語教育』[2] Jackendoff, R., and Audring, J. *The Texture of the Lexicon: Relational Morphology and the Parallel Architecture.*

第九室（11月24日午前）

司会　小田登志子　（東京経済大学）

「程度強調表現 so と程度節の統語構造と意味—統語構造の階層性への示唆—」
(The Syntax and Semantics of the Degree Intensifier *So* and its Dependent Degree Clause: Implications for Syntactic Hierarchy)

本多正敏（宮崎大学）

本発表では、程度強調表現 so と that 節（以下、程度節）の共起構造（例：Mary was *so* tired that she fell asleep in the car.）を考察し、当該共起構造は節領域と動詞句領域の両方で成立することを論じる。先行研究では、so は LF 移動によって節領域で作用域を取り、結果解釈を伴う程度節も外置によって節領域の要素としてふるまうと議論されている（例：Guéron and May (1984[1]), Rochemont and Culicover (1997[2]) ）。この議論を踏まえ、本発表では、so と程度節の共起構造は動詞句領域でも成立し、程度節は高程度解釈（概略、程度節内で so が強調する程度の高さが文脈に基づいて指定される解釈）を伴うことを経験的に論じる。そして、上記の事実を包括的に説明するため、Bhatt and Pancheva (2004)[3]の比較級表現の分析を so と程度節の共起構造に応用した分析を提案する。また、本発表の提案は、主節に対する程度節の従属度の観点（例：遠藤(2009)[4]）からも支持されることを示す。

[1] “Extraposition and Logical Form” [2] “Deriving Dependent Right Adjuncts in E” [3]“Late Merger of Degree Clauses” [4] 「話し手と聞き手のカートグラフィー」

「動詞句省略先行詞条件再考：動詞句が含む変項指標の一致を要件とする英語 ACD と関連構文分析」（“Rethinking the Antecedent Condition of VP-ellipsis: an analysis of ACD and related constructions under a matching requirement for indices of variables contained in the VP”）

高橋眞理（京都産業大学）

英語動詞句省略(VPE)の先行詞条件定式化の鍵となる構文の一つに、省略を受ける VP_{β} が表層構造においてその先行詞 VP_{α} 内に含まれる antecedent-contained deletion 構文(ACD): Polly [$_{VP\alpha}$ visited every city that ERIK did [$_{VP\beta}$ visit]]がある。ACD は「顕示的/非顕示的移動の結果を表示した LF が意味解釈部門への入力になる」とする「LF 仮説」の証拠の一つと見なされてきた。LF 仮説下での注目すべき ACD 分析の一つに Heim(1997[1])があるが、Heim 説やその修正案に対しては、LF 表示や変項・指標の存在を認めない立場を採る Jacobson(2019[2], *etc.*)が概念的・経験的両側面からの批判を展開している。本発表の目的は、「LF 仮説」を維持し、Jacobson からの批判に応えられる ACD 分析を提示することである。「VP 条件」を独立した要件とはせず、VPE　先行詞条件を「適切対比条件に」一本化する提案も多数あるが、その逆に、VP 条

件を強化する方向での提案を行う。

[1] Heim, I. (1997) “Predicates or formulas? Evidence from ellipsis” *SALT 7*. [2] Jacobson, P. (2019) “Why we still don't need/want variables:Two SALTy case studies” *SALT 29*.

〈シンポジウム〉

A 室（11 月 23 日午後）

＊公開特別シンポジウム

「人（ヒト）の言葉を育む力」

司会　三上　傑（大東文化大学）

現在、言語学はその進展とともに、多くの研究分野・立場に細分化され、それぞれの研究者がその分野についての深い知識を持つなど、高度に専門化されている現状がある。しかしながら、専門分野への固執は、視野が偏り狭まる危険性をはらんでいる。また、今日、単独の分野だけでは解決が難しい課題や研究テーマに対して、関連する複数の分野で連携・融合を図りながら、新たな進展を見出す必要性もますます高まっている。

本シンポジウムは、「人（ヒト）の言葉を育む力」を共通のテーマに、言語学の内外を問わず、様々な研究分野の専門家に、それぞれの得意とする領域から話題を提供してもらい、互いの知識や経験を共有することを目的とする。そして、言語学のさらなる発展可能性や他分野への応用可能性、さらには異分野融合による学際的研究の開拓及び推進の可能性を多角的に検討する契機としたい。

「言語学はどこまで科学たりうるか
—人間本性の解明を目指して—」

講師　西山佑司（慶應義塾大学名誉教授）

ミニマリスト・プログラム（言語能力についての理論）と関連性理論（意図明示推論的コミュニケーションについての理論）の両方を踏まえて、科学としての言語学はどうあるべきかということを論じ、そこから、「人（ヒト）の言葉を育む力」について考察する。通常、「人（ヒト）の言葉を育む力」について語ろうとすると、どうしても「全人間的 (personal)」なレベルでの話しになる傾向が強い。しかし、それはきわめて危険である。これを反証可能な問題として捉え、少しでも実質的な議論として前へ進めるためには、一見遠回りのようであっても、言語の「副人間的 (sub-personal)」なレベル、つまり、領域限定的、無意識的かつ自動的に計算する心的システム（心的モジュール）に立ち戻って科学的な説明理論（I-言語についての生成理論、および発話解釈についての関連性理論）を構築した上での議論が必要である。

「それは「応用」研究なのか？
—悪口の形式化から考える理論言語学—」

講師　和泉　悠（南山大学）

本発表の前半では、近年注目を集めている、ヘイトスピーチやプロパガンダといった人間言語の有害な使用に関する研究の一例として、悪口の形式意味論・語用論的分析を紹介する。和泉 (2023a [1], 2023b [2])によると、悪口は言語的に表現される「ヴァーチャルな劣位化」であり、会話の共有基盤における、人物の関係性に関する値を操作するものとしてモデル化される。本発表の後半では、そうした、ときに「応用的」とみなされる研究は、本当に「応用的」なのか、それとも言語研究において本質的な要素なのかという、方法論的な問いを検討する。人間の社会的言語使用の探究が、意味研究の中心であるといった発想 (Beaver and Stanley (2023 [3]))を、より生成文法的な内在主義的方法論 (Knowlton et al. (2021 [4]))などと比較しつつ考察する。

[1]「ヴァーチャル劣位化としての悪口」,『倫理学年報』第 72 集. [2]『悪口ってなんだろう』, 筑摩書房. [3] *The Politics of Lan-guage*, Princeton University Press. [4] “Lin-guistic Meanings as Cognitive Instructions,” *Annals of the New York Academy of Sciences* 1500.

「みなまできかずにわかるのか
—人間の予測処理と無意識の知—」

講師　広瀬友紀（東京大学）

私たちは普段言語を用いたやりとりにおいて、時間軸に沿ってしか得られない入力を、遅延を感じることなく即時的に理解しているが、そこには一定の予測的な処理が関わると考えられる。構文レベルでは、日本語のような主要部後置言語でも、正しい解釈を一義的に保証する情報が得られる段階まで待つことなく未入力の要素を予測しながら理解が進むことを示す研究結果が報告されている。こうした予測に主に貢献する格助詞の文法的役割は、明示的な言語知識として母語話者には比較的実感可能である。それでは、母語話者の脳内に育まれた言語知識のなかでも、話者自身に明示的に意識されない法則や制約は予測において同様の役割を持つだろうか。

本発表では、語彙アクセントとその変化に関わる音韻規則という、一般の母語話者にはほぼ暗黙知とされる情報が、言語理解において素早く参照され、続く入力の予測に寄与していることを示す一連の心理言語学実験を紹介する。

「通常過程における言語習得は可能性の一つにすぎない—「自閉症は津軽弁を話さない」研究から—」

講師　松本敏治（教育心理支援教室・研究所「ガジュマルつがる」代表）

松本は、青森県津軽地方の発達障害に関わる人々の間に存在する「自閉症は津軽弁を話さない」との風聞をきっかけに、自閉スペクトラム症（ASD）の方言不使用の研究を行ってきた。調査の結果は、ASD の方言不使用という印象が全国で見られること、方言語彙の使用も乏しいことを示した。また、アイスランドおよび北アフリカなどメディア主要言語と自然言語に乖離のある社会において見られる ASD の言語の特徴（メディア言語の使用）から、ASD がメディア言語の影響を強く受けている可能性を指摘した (松本 (2024 [1]))。

これらの結果は、ASD の中にはその特性のために定型とは異なる言語習得過程を辿る人がいることを示す。さらに言えば通常の言語習得過程とされるものは定型発達の人々が有する社会的手がかりへの選好・人への注意・意図理解などの特性に基づくもので、多くの言語習得のありようの一つに過ぎないのかもしれない。

[1]『自閉症は英語がお好き!?』, 福村出版.

B 室（11 月 23 日午後）

“Understanding and Extending the Miracle Creed Framework”(E)

司会　Asako Uchibori (The University of Tokyo)

講師　T. Daniel Seely (Eastern Michigan University)

講師　Hisatsugu Kitahara (Keio University)

This symposium explores a number of extensions of the Miracle Creed MC framework of Chomsky 2023 & the Keio-EMU lectures, specifically: (i) Internal Merge transitions a theta-marked element E from the propositional to the clausal domain where E is subject to clausal domain properties and (ii) a strong form of Minimal Yield MY derives desirable aspects of the phase-impenetrability condition PIC and the Duality of Semantics.

To fully appreciate these innovations, we first review key aspects of the Miracle Creed system including the guiding principle that Merge and all relations derived from Merge “are thought-related, with semantic properties interpreted at CI.” There are a number of categories of thought: *propositional,* basic theta-structure; and *clausal*, force- and information-related (interrogative, topic, focus, among others). For the MC, this duality of semantics is derived from the two modes of application of Merge, namely External Merge EM for the propositional domain and Internal Merge IM for the clausal domain. We trace just how this works in the MC and its consequences, in particular its reanalysis of successive cyclic movement “in terms of access to the closest phase in the derivation.”

Having provided the necessary background, our primary goal is to pursue the consequences, both conceptual and empirical, of a number of extensions of the MC. We first consider the idea that IM exits an element E from the propositional domain and enters it into the propositional domain where E is, naturally enough, subject to properties of the propositional domain. Assuming that only theta-marked elements are subject to IM, it follows that there is exactly one instance of IM for any given element. Thus an object raises to the ‘object shifted’ position and the subject raises to spec of Infl, and no farther. This, in turn, requires a reconsideration of the MC’s reanalysis of successive cyclic movement in terms of phase-based access under minimal search. We show the consequences of this in a number of empirical domains including Parasitic Gaps and Across-the-Board, Remnant Movement, and cross-linguistic variation.

Finally, we explore a strong form of MY whereby an application of Merge must decrease (if possible) and can never increase the number of accessible terms in the WorkSpace. We show that this version of MY has a number of important advantages, including

that it derives the PIC and, in fact, derives the Duality of Semantics, such duality following as a desideratum, while maintain the empirical advantages traced above.

Overall, we seek to advance understanding of the MC system and consider its prospects for future work, consistent with the Strong Minimalist Thesis. Seely and Kitahara, taking charge in turn, present research materials, and Uchibori make relevant comments on them wherever necessary.

C 室（11 月 23 日午後）

「実験語用論の最先端：やってみなくちゃわからない、言語コミュニケーションへの多面的アプローチ」

司会　時本真吾（目白大学）

言語コミュニケーションのメカニズムを明らかにする実験語用論の最新知見を提示し、その理論的示唆を議論するとともに、種々の実験手法を紹介し、聴衆の実験語用論への参画を期待する。

多様な研究の紹介を意図して、言語形式は、語（日本語を含む複数言語における指示詞）、文（授与動詞（あげる/もらう）、終助詞（よ/ね）を含む文）、談話を対象とする。実験手法については、言語理解・産出の行動実験（オンライン）と談話の聴覚提示に伴う脳波計測を用いる。また個人差の体系的理解を意図して、実験参加者には、高校生、成人、自閉スペクトラム症者を含め、個人差の指標として対人反応性指標、青年前期用敏感性尺度を考察する。さらに、実験の設計ならびに結果の解釈に不可欠な理論的背景・枠組みの在り方について議論する。

「状況モデル構築としての語用論的推論」

講師　時本真吾（目白大学）

本研究では間接的発話理解のメカニズムを神経言語学的に考察する。3 人の話者から成る会話を、(1)推論のための文脈が明示的か非明示的か、(2)話者の含意が現在の意志または過去の経験のいずれに関わるかの２要因で操作した。会話の聴覚呈示に伴う実験参加者の頭皮上脳波に発生源推定を施し、メンタライジングネットワークと時間認知ネットワークとの因果的 connectivity を分析した結果、含意が過去の経験に関わる場合にのみ、両ネットワーク間に有意な因果的 connectivity が認められた。本研究では、この connectivity を間接的発話理解における時間処理の現れと解釈し、会話的推意理解の推論は、「協調の原理」を前提にした命題的論理の連鎖ではなく、複数の次元を備えた状況モデル構築であることを主張する。

「自閉スペクトラム症者と定型発達者の文脈に応じた終助詞使用の違いと共通点」

講師　直江大河（昭和大学発達障害医療研究所）

神経発達症の一種である自閉スペクトラム症（autism spectrum disorder, ASD）者は、言語・知的障害の併存と独立に、言語の語用論的側面が一貫して定型発達（typical developed, TD）者と異なる。本発表では、成人 ASD 者の文脈に応じた終助詞産出と理解を検討した実験語用論研究を報告する。文脈と文末が空欄になった発話文を提示して終助詞を発話させる談話完成実験の結果、ASD 者は TD 者よりも終助詞「ね」使用頻度が低く、非典型的な文脈での終助詞「よ」使用頻度が高かった。一方で、文脈に対する終助詞「よ」「ね」の適切さを評定させる実験からは、多数の ASD 者が TD 者と同様に終助詞の語用論的な知識を持っていることが示唆された。ASD 者と TD 者の終助詞産出・理解の傾向の乖離がどこから生じるのか、神経発達症研究の動向とも照らし合わせながら考察する。本研究の結果は、実際の談話における言語使用を実験語用論がどこまで説明し得るのかについて注意深く考える必要があることを示唆する。

「現場指示時における指示詞選択の文脈条件に関する通言語的比較」

講師　菅谷友亮（中京大学）

本研究では、語用論の重要なトピックの一つである直示（現場指示）用法における指示詞の使用に関して言語横断的に実験調査した。複数の選択肢から一つの指示詞を選ぶために視覚・空間的な関係性の把握が前提となるが、そのプロセスは主観的で柔軟性があり、言語によって異なると想定できる。実際に、Peeters et al. (2014) や Rubio-Fernandez (2022) の研究で指示詞にお

ける「聞き手」の役割に関して言語差があることが実験実証された。本研究では、以上の研究を参考にして、実験参加者に空間的状況を示す視覚刺激を呈示し指示詞選択する課題を行わせた、それにより状況的文脈をどのように解釈し指示詞を産出しているかを実証的に明らかにした。今まで検証されていない様々な文脈条件や対象言語を加えてオンライン実験を実施した。

[1] Peeters, David, Zeynep Azar, and Asli Özyürek. 2014. "The interplay between joint attention, physical proximity, and pointing gesture in demonstrative choice." *Proceedings of the Annual Meeting of the Cognitive Science Society* 36: 1144–1149.

[2] Rubio-Fernandez, Paula. (2022) "Demonstrative systems: From linguistic typology to social cognition." *Cognitive Psychology* 139: 101519.

「授与動詞の理解における共感性の役割」

講師　米田英嗣（青山学院大学）

授与動詞を含んだ文章の理解において、共感性および感覚処理感受性がいかに関与しているかを検討した。Web 調査によって 229 名の高校生(高校 1 年生 85 名(女性 42 名)、高校 2 年生 77 名 (女性 40 名)、高校 3 年生 67 名 (女性 30 名)が調査に参加した。二人の人物が登場する文章を作成し、「あげる」(「物」がウチからソトに出る場合に使う)と「もらう」(「物」がソトからウチへ移動する場合に使う)という授与動詞を用いた文の実現可能性を判断してもらった。二人の登場人物が同じ時間軸で、なおかつ同じ空間にいる場合は、物の授与が可能であるが、別の空間にいる場合は不可能であると定義した。媒介分析を行った結果、日本語版対人反応性指標で測定される共感性は、日本語版青年前期用敏感性尺度で測定される感覚処理感受性が媒介して、授与動詞の理解と関連することがわかった。一方で、感覚処理感受性は共感性を媒介せずに、授与動詞の理解と関連していた。このことから、視点取得の基盤は読者の共感性にあり、感覚に対する感受性がその上に位置して、高次な言語理解である授与動詞の理解を支えるということが示唆された。

「ディスカッション： 実験語用論のデザインと結果、理論的背景と示唆」

ディスカッサント　滝浦真人（放送大学）

人の「意識」は当てにならず、その持ち主をも簡単に裏切るから、嘘をつかないデータが欲しければ、実際に脳で起こっていることや、少なくとも「意識」の手前にある脳の働きを捉えることが必要だ—「実験」的研究に通底する考え方と言っていいだろう。

それゆえこれが、そのまま実験的手法の強みとなる。と同時に、そのようなデータは、それ自体の意味を直接的には読めないことが多く、必ず解釈を必要とする。さらに、解釈は（具体性の度合いはともかく）何らかの理論に基づくから、必ず何かしら理論的な背景が想定される。そのようにして得られた解釈は、翻って、理論のあり方を検証する重要な材料ともなる。

実験的手法におけるデザインと結果、理論的背景と示唆をめぐって、会話的推意理解の推論、終助詞の産出と理解、指示詞選択の文脈条件、授受動詞の理解と共感性、に関する４つの研究を通して見えてくる観点を検討したい。

D 室（11 月 23 日午後）

「言語変化とパラメータ：ことばの多様性はどこから生まれたのか？」

司会　保坂道雄（日本大学）

言語の普遍性と多様性は、言語研究が説明すべき究極の対象と言える。極小主義以前の生成文法では、各種の原理とそれに付随するパラメータを用いて、この２つの関係を説明し大いなる成果をあげてきた。しかしながら、極小主義の発展と共に、より制限的な普遍文法が追究され、パラメータの存在もまた議論の的になっている。

特に、言語変化を対象とする研究では、言語獲得時のパラメータ設定が変化を引き起こす要因として提案され、その後様々な文法変化がパラメータにより説明されてきた。しかしながら、近年、より厳密化したパラメータ階層仮説(Roberts 2019[1])、第３要因に帰着させる説明(Gelderen 2022[2])、言語獲得時の parsing を重視する仮説(Lightfoot 2020[3])等が提案され、百家争鳴の様相を呈している。

本シンポジウムでは、パラメータの存在について独自の見解を持つ４名の講師により、多角

的に議論を行う。

[1] *Parameter Hierarchies & Universal Grammar*, CUP. [2] *Third Factors in Language Variation and Change*, CUP. [3] *Born to Parse*, MIT Press.

「開かれた UG におけるパラメータの在処:クラスター効果と単一言語内変異をめぐって」

講師　縄田裕幸（島根大学）

UG の一部に二価的パラメータが組み込まれていたかつての「原理とパラメータのアプローチ」と異なり、極小主義では言語間の変異と変化は UG で指定されていない細部の構造が言語獲得あるいは第三要因によって創発すると考えられている (Roberts (2019[1]), Lightfoot (2020[2]), Gelderen (2022[3])。また英語の通時的変化に目を移すと、ある時期に多くの構文が連動して変化するクラスター効果が認められると同時に、一部の環境で古い形式が保持され、結果として単一の言語内でパラメータ変異が生じている事例も観察される。

本発表では、現在の「開かれた UG」観のもとで統語的パラメータの可変域がどのように決定されるのかを論じるとともに、英語史における変化のクラスター効果と単一言語内パラメータ変異がどのように発生したのかを考察する。理論的枠組みとして縄田(2024[4])で提案されている「素性継承パラメータ」を仮定し、機能範疇間の素性分布によって統語部門内部で言語変異が生じるメカニズムを明らかにしたい。

[1] *Parameter Hierarchies and Universal Grammar*, Oxford UP. [2] *Born to Parse*, MIT Press. [3] *Third Factors in Language Variation and Change*, Cambridge UP. [4]「英語の節構造の変化」『生成文法と言語変化』開拓社.

「wh 移動パラメータの値変化と Q 小辞の文法化」

講師　小川芳樹（東北大学）

日本語については、奈良時代には存在した wh 句の顕在的左方移動が、いつまでに消失したかに関する Watanabe (2002)と Ikawa (1998)の主張の対立がある。

本発表では、この通時的変化について、ミクロパラメータ統語論と文法化の統語論（Roberts 2019[4], Roberts and Roussou 2003[5]）の観点から、次の 3 点を主張する。

(1) Q 小辞「か」は文法化により、機能範疇 Focus から Force に上方再分析された。

(2) 「か」が Focus であった時代には、「か」の主要部移動 (Hagstrom 1998[2])と、Wh と「か」を含む FocusP の左方随伴移動(Cable 2010[1])が起きていたが、「か」が江戸時代に Force[+wh]に文法化したことで、いずれの移動も完全に消失した。

(3) Q 小辞の出現と wh 句の左方移動の相補性を予測する Cheng (1991[2])の Clause Typing Hypothesis に対する Bruening (2007)の反論は、Q 小辞の文法化や FocusP の左方移動を考慮に入れていない点で問題がある。

[1] *The Grammar of Q: Q-Particles, Wh-Movement, and Pied-Piping*, Oxford, [2] *On the Typology of WH-Questions*, Ph.D., MIT. [3] *Decomposing Questions*, Ph.D., MIT. [4] *Parameter Hierarchies & Universal Grammar*, Oxford, [5] *Syntactic Change*, Cambridge.

「パラメータ理論再考:言語の文化進化の視点から」

講師　保坂道雄（日本大学）

文法の多様性はどこから生まれたのか。Lightfoot (2017[1])は、“All grammatical variation results from change.”と述べ、歴史的変化に根ざすものであるとする。これまでその変化の要因となるのがパラメータであると考えられてきたが、極小主義の進化的妥当性の観点からパラメータの存在を再考する研究が進んでいる。

本発表では、こうした現状に対し、近年の通時的研究（Lightfoot (2020[2]), Roberts (2021[3]), Biberauer (2018[4]), Gelderen (2022[5])等)を取り上げ、その問題点を指摘し、言語の文化進化の視座から新たな提案を行う。

具体的には、動詞移動、助動詞、心理動詞等の英語の通時的変化に着目し、内的言語と外的言語の狭間で生じる創発現象(emergence)がその背後に存在することを主張する。従来の理論的枠組みを越えた進化的妥当性を満たす新たな言語研究の可能性を提示したい。

[1]“Discovering new variable properties without parameters,”*Linguistic Analysis* 41(3-4), [2] *Born to Parse*, MIT Press. [3] *Diachronic Syntax*, OUP. [4]“Pro-drop and emergent parameter hierarchies,”*Null Subjects in Generative Grammar*,

OUP. [5] *Third Factors in Language Variation and Change*. CUP.

「外在化による言語の多様性と変化」

講師　時崎久夫（札幌大学）

本発表では、ミニマリストの考えに従い、計算部門で構築される統語構造は普遍的で、言語の多様性は構造が外在化される際に生じること（Berwick and Chomsky (2011 [1])）、また Longobardi (2001 [2]) などの慣性原理に従い、外的要因による音韻変化のために様々な言語変化が生じることを論じる。

英語では、ノルマン征服以降に古フランス語が流入し、本来のゲルマン語強勢にロマンス語強勢が加わって優勢となった。しかし社会的要因により、15 世紀からゲルマン語強勢が復権した。この強勢位置の二度の変化が、語順の変化（OV から VO、副詞と動詞、s 属格と of 属格、前置詞残留）や大母音推移を引き起こしたという仮説を示し、その妥当性を検証する。

この考えに基づけば、多くの統語・形態・音韻パラメータで扱われてきた現象を、各（時代の）言語の音韻特性による外在化の違いとして統一することができ、言語獲得の問題も解決できると考える。

[1] “The Biolinguistic Program: The Current State of its Development” in Di Sciullo and Boeckx (eds.) *The Biolinguistic Enterprise*, Oxford. [2] “Formal Syntax, Diachronic Minimalism, and Etymology: The History of French, *Chez*,” *Linguistic Inquiry* 32 (2).

〈特別講演〉

第一講演（11 月 24 日午後）

司会　熊谷学而（関西大学）

「連濁は何のためにあるのか？：決着問題、未解決問題、そして音韻理論のいま」

田中伸一（東京大学）

連濁研究が 80 年代から盛況なのは、音韻・形態・意味・統語を含む文法はもとより、その獲得・第二言語学習・方言変異・歴史変化も問題となる複合的な研究対象だからである。用いる手法も理論研究・心理実験・統計分析を問わず、その技術的発展とともに、言語学全体において国内外のあらゆる研究者を巻き込んできた。

とりわけ文法の観点から見れば、連濁の研究史はまさに、その適用を起動／阻止する諸条件・要因を発見することで、例外を例外でなくする問題解決の歴史であった。

本講演の狙いは「そもそも連濁は何のためにあるのか」の考察にある。その目的のため、連濁研究の通史を概観しつつ、連濁適用を起動／阻止する諸条件・要因について、解決済みの問題と未解決の問題を紹介する。さらに後者の関連で、連濁の複合的特徴ゆえの「例外処理が提起する理論的問題」、「他現象との相互作用が提起する不透明性問題」、「手法の違いが提起する矛盾の問題」を取り上げ、独自の解決を試みる。

第二講演（11 月 24 日午後）

司会　堀内ふみ野（日本女子大学）

「Iwis－語用論標識としての発達と衰退－」

柴﨑礼士郎（明治大学）

文法化研究の隆盛に伴い、語用論標識研究も多言語からの報告に基づく知見に溢れている。例えば、語源や語義を共有する語彙は類似する発達経緯を辿ることが報告されている（Hansen 2018 [1]）。本発表では、ゲルマン語圏に広く同語源語が確認できる英語語彙 *iwis* に注目し、その盛衰を考察する。ゲルマン語圏の対応語には、その使用頻度の差異にかかわらず、形容詞および副詞用法が定着しているが、英語 *iwis* の歴史的な発達過程にも同じことが言えるのだろうか。Shibasaki (in press [2])を足掛かりとして、*iwis* の成長と衰退の理由を語源、音韻、形態統語、語法の面から考察し、従来あまり言及されることのなかった歴史的変化を掘り下げてみる。

[1] “Cyclic Phenomena in the Evolution of Pragmatic Markers” in Bordería and Lamas (eds.) *Beyond Grammaticalization and Discourse Markers*, Brill. [2] “A Little More Thought to the Decline of *iwis*” in Imahayashi, Ogura and Nakao (eds.) *Linguistic and Stylistic Approaches to Speech, Thought and Writing in English*, Peter Lang.

第三講演（11 月 24 日午後）

司会　菅野　悟（東京理科大学）

「主要部パラメータ再考－外在化の観点から－」

土橋善仁（中京大学）

ミニマリスト・プログラムにおける統語論研究では、語順を統語部門の外、すなわち外在化の過程で決定するという考え方が広く受け入れられている。しかし、具体的な語順決定プロセスについては、必ずしも十分な意見の一致が見られていない。本講演では、Dobashi (2024 [1]) で提案された「拡大主要部パラメータ」の概要を示しその帰結を検討する。従来の主要部パラメータは句 (XP) 内の主要部と補部の関係にもとづいて定式化されていたが、拡大主要部パラメータは、外在化の過程において循環領域（フェイズなど）内の主要部に着目し、主要部の形態的具現形と主要部間の隣接関係にもとづき定式化される。英語、日本語、チェワ語、ドイツ語を例に、基本的な語順がどのように決定されるのかを示す。また、本提案の帰結として、Final-Over-Final Condition (Sheehan et al. (2017 [2]) などの原理的説明を試みる。

[1] “Heads and Word Order” presented at the 15th Workshop on Phonological Externalization. [2] *The Final-Over-Final Condition*, MIT Press.